

令和元年6月14日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K08811

研究課題名(和文) 認知症のBPSD低減に有効な個人固有の役割活動を特定する評価マニュアルの作成

研究課題名(英文) Development of an evaluation manual to identify individual activities effective for reduction of BPSD

研究代表者

小林 法一 (Kobayashi, Norikazu)

首都大学東京・人間健康科学研究科・教授

研究者番号：30333652

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：

認知症の人にみられる徘徊や妄想、暴言・暴行などは、BPSDと呼ばれ、適切な支援によって軽減できることが知られている。代表的なのが本人にとって大切で意味のある役割活動への参加支援である。しかし、そうした活動は個人によって異なるため、その特定が最大の課題となっている。本研究では、BPSDの低減に有効な個人固有の活動・役割を特定する評価方法の開発に取り組んだ。その結果、2つのツールを活用する有望な方法を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

介護の現場では、本人が何を望んでいるのか、いま何をしたいのかといった思いを理解し、それに応える支援を行うことが重視されている。これにより驚くほど穏やかとなりBPSDも収まる場合がある。しかし、思いの理解は難しく「何がしたいのか」(活動)の特定に苦慮するケースが少なくない。本研究はこの課題に正面から応えようとするものであり、有望な方法が将来的に確立されることによってもたらされる利益は非常に大きい。今回はその可能性を広げる成果を得た。

研究成果の概要(英文)：

One of the typical symptoms of dementia is BPSD (behavioral and psychological symptoms of dementia). BPSD occur in all types of dementia and includes the following manifestations: Depression, Anxiety, Delusion, Apathy

It is known that BPSD can be alleviated by appropriate care. Representative of them is support for participation in important and meaningful role activities for the individual. However, because such activities vary among individuals, the identification of activities is the greatest challenge. In this study, we worked on the development of evaluation methods to identify individual activities that are effective in reducing BPSD. As a result, we found a promising way to use two tools.

研究分野：リハビリテーション，介護予防，作業療法，作業行動科学

キーワード：認知症 認知症ケア 作業療法 生活行為 人間作業モデル

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

要介護高齢者の増加と社会保障費の急増に対し、政府は「たとえ介護が必要となっても、住み慣れた地域で暮らし続ける社会」を構築し、認知症の人を施設ケアではなく地域生活者として支援すべきであるとの方針を打ち出している。この指針のもと、250 万人以上とされている認知症高齢者の大半は在宅で生活しており、障害を持ちながらも地域で暮らす生活者としての支援策が求められている。

認知症の人の介護においては、認知症特有の行動・心理状況、いわゆる BPSD (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia) がたびたび課題に挙げられる。その出現率はアパシー(97%) 妄想(62%) 易刺激性(60%) 不快感(53%) 不安(51%) 異常行動(47%) 興奮(45%)、脱抑制(31%) などとする報告がある。これをいかに低減するかが介護負担や家族介護の継続を大きく左右する。

BPSD は適切なケアによって低減できることが経験的に知られている。本人に適した“活動や役割”を特定し、参加の機会を整え促すのがその代表である。認知症者のリハビリテーションや介護では、本人の生活歴や趣味・興味を理解し、BPSD の抑制に効果的な個人固有の活動を取り入れることが重視されている。しかし、そうした活動は個人によって異なるため、その特定が最大の課題となっている。ライフレビュー・回想法、DCM(Dementia Care Mapping)法などの有用な評価技法も開発されているが、これらは実施にあたって実務者の人材育成が必要であり、専門的能力も必要である。認知症高齢者の急増に対応するには、より簡便な対処方法が求められる。

以上の背景から、個人にとって“大切に意味のある役割活動”を支援者が簡便かつ短時間で評価する方法の開発に着手した。

2. 研究の目的

研究の最終目標は、BPSD の低減に効果的な個人固有の活動・役割を特定する評価マニュアルの開発である。これまでに申請者は、その核となる以下の 2 つの tool を考案、試行している。本研究においては、これらの tool の基本性能を明らかにする実証研究を行い、多職種間で共有できる評価マニュアル(暫定版)を開発する。

(1) 認知症高齢者のための絵カード評価法

- tool の目的
認知症高齢者から「自分にとって重要な活動」についての情報を得るために開発された。
- tool の構成
様々な活動が描かれた 70 枚のカードで構成されている。これらの活動は高齢者施設利用者を対象とした実態調査をもとに選ばれており、絵の認識については HDS-R 10 点以上の者であれば、94%以上の正答率が保証されている。
- 使用方法
対象者にカードを提示し、「重要な活動」を選択して頂くとともに、その理由を伺う。

(2) 色カルタ〜クオリア・ゲーム

- tool の目的
余暇の提供、色刺激によるコミュニケーションの促進
- tool の構成
取り札(128 色のカード)128 枚・読み札 32 枚
- 使用方法
リーダーが読み札や色にまつわるお題を読み上げ、参加者全員が適当な取り札(色カード)を選ぶ。次に、その色カードを選んだ理由について、エピソードを語って頂く。

3. 研究の方法

(1) 認知症高齢者の語りの内容分析

tool を用いてコミュニケーションを図り、参加者の語りを記録する。
趣味や興味、ライフイベント、果たしてきた役割、成功体験、特技、価値観、人生観、後悔、コミット事項など、“大切に意味のある役割や活動”の特定に繋がる情報を抽出する。
抽出内容を分析し、収集できる情報を項目・構造化する。

(2) 色カルタの効果 専門家の意見

対象：色カルタを実施した経験のある作業療法士
デザイン：色カルタに期待できる臨床的效果に関するヒアリング
分析：ヒアリング内容の質的記述的分析

(3) 色カルタの効果 実証研究

対象：回復期リハビリテーション病棟に入院中の認知機能低下が認められる高齢者
デザイン：非ランダム化比較試験。介入群には通常のリハビリテーションやケアサービスに加えて、週 2 回 4 週間、計 8 回の色カルタ(一回 30 分程度)を実施する。非介入群は

通常のサービスのみとする。

効果指標: Mini-Mental State Examination (MMSE), 日本語版 NPI-NH (Japanese translation of Neuropsychiatric Inventory Nursing Home Version), 人間作業モデルスクリーニングツール (The Model of Human Occupation Screening Tool: 以下, MOHOST), コミュニケーションと交流技能 (Assessment of Communication and Interaction Skills: 以下, ACIS), 機能的自立度評価法 (Functional Independence Measure: 以下, FIM), 意志質問紙 (Volitional Questionnaire: 以下, VQ)

4. 研究成果

(1) tool 実施中の高齢者の語りの内容分析

高齢者施設3施設で介護サービスを利用している認知機能に問題のない高齢者21名を対象に tool を実践し, 実施中の発話内容を分析した。分析のポイントは, 「色カルタ」ゲームを自由に楽しみながら行う最中の発話内容から「本人にとって大切で意味のある作業や役割活動の特定に役立つ情報が得られるか」とした。結果は有益な情報が豊富に含まれることを示した。特に作業同一性(作業的存在として自分は何者なのか, どうありたいのかについての感覚)に関する情報が多く含まれていた。また, 複数回繰り返して実践することで, より多くの情報が得られることが明らかになった。

以上より, 個人固有の活動・役割を特定する評価として本 tool を用いることの妥当性ならびに, 効果的な活用方法(複数回の実施)が明らかになった。

(2) 色カルタの効果 専門家の意見

色カルタに期待する効果についての作業療法士10名の意見は, 【交流機会の向上】、【精神的・情緒的变化】、【活動・参加レベルの改善】、【認知機能の変化】、【覚醒度・意識レベルの向上】、【社会機能の向上】、【他者への影響】の7カテゴリーに集約された。実践経験のある専門家は, 心身機能の改善から活動・参加レベルの変化まで, 幅広い効果を期待していると考えられた。

実証研究を進める際のアウトカム指標として考慮すべき知見を得る成果があった。

(3) 色カルタの効果 実証研究

変化量の群間比較において, MOHOST, ACIS, NPI-NH の合計得点に有意差が認められ, いずれも色カルタを用いた集団活動の有効性を支持する結果となった。効果量は中等度以上の値であり, 臨床的にも十分な効果を期待できる結果であった。特にコミュニケーション能力を評価する ACIS の効果量が 0.71 と高かった。NPI-NH (職業負担度) にも有意差が認められ, 色カルタプログラムの効果は病棟生活における介護負担軽減にも汎化する可能性が示された。

色カルタの高い効果を示唆する有望な成果が得られた。今後はさらに精度の高い実証研究で効果を確認した上で, 運用マニュアルを整備し, 研究成果の実践現場への還元を図りたい。

表4. 変化量の群間比較

		実施群 (n=14)	非実施群 (n=14)	P	r
		中央値 (四分位範囲)	中央値 (四分位範囲)		
MMSE		0.0(0.0-3.0)	1.5 (-0.75-3.0) ※	0.616	0.11
MOHOST	作業への動機づけ	1.0(1.0-2.8)	0.0(0.0-0.0)	0.003*	0.58
	作業のパターン	1.0(0.25-1.0)	0.0(0.0-0.75)	0.012*	0.50
	コミュニケーションと交流技能	1.0(1.0-1.8)	1.0(0.0-1.0)	0.137	0.31
	処理技能	1.0(0.0-1.0)	0.0(0.0-0.0)	0.104	0.35
	運動技能	1.0(0.0-2.0)	1.0(0.0-2.0)	0.874	0.03
	環境	2.0(1.0-2.0)	0.0(0.0-0.0)	0.001*	0.68
	合計	8.0(4.3-10.0)	2.0(0.0-5.5)	0.001*	0.58
ACIS	身体性	2.0(1.0-3.0)	1.0(0.25-1.0)	0.104	0.32
	情報の交換	3.5(3.0-4.8)	0.0(0.0-0.75)	0.000*	0.67
	関係	1.0(1.0-2.8)	0.0(0.0-1.0)	0.056	0.38
	合計	7.0(6.0-9.0)	1.0(0.25-3.0)	0.000*	0.71
NPI-NH		4.5(0.75-8.0)	0.0(0.0-3.0)	0.019*	0.45
NPI-NH (職業負担度)		2.0(0.25-4.5)	0.0(0.0-0.75)	0.019*	0.46
FIM	運動項目	8.0(4.0-10.8)	7.0(3.3-19.0)	0.667	0.08
	認知項目	2.0(0.25-2.8)	0.0(0.0-1.0)	0.050*	0.40
	合計	8.5(6.0-12.3)	8.5(4.5-19.0)	0.839	0.04

中央値(四分位範囲): 中央値(25-75パーセントイル)

*: p<0.05, r: 効果量(0.10: 効果量小, 0.30: 効果量中, 0.50: 効果量大)

※1名の欠損値あり

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

- 木村夏実, 小林法一: 回復期リハビリテーション病棟入院中の高齢者への色カルタを用いた集団活動に期待される効果 - 実施経験のある作業療法士へのインタビューを通して - . 査読有り, 東京作業療法 6 巻, 37-42, 2018 .
- 山田 孝, 篠原和也, 小林法一, 會田玉美: 認知症高齢者に作業を実施した群と作業を実施しなかった群の比較 ~ 前向きコホート研究 ~ 査読有り, 作業行動研究 21 巻, 1-9, 2018 .
- 山田 孝, 篠原和也, 小林法一, 會田玉美: 認知症高齢者に対するプログラム計画のための文献レビュー . 査読有り, 作業行動研究 21 巻, 1-11, 2017 .
- 井口知也, 小林法一: 認知症の人の自律性を尊重し高める支援 認知症の人にとって意味のある作業をいかに見いだすのか . 査読無, 老年精神医学雑誌 26 巻, 993-998, 2015 .

〔学会発表〕(計11件)

- 小林法一: 普通の生活を支えるケア . 第 20 回日本認知症ケア学会大会(招待講演), 2019 .
- 二村元気, 船越健太, 三浦南海子, 小林法一: 通所リハにおける色かるたを用いた取り組み . 第 52 回日本作業療法学会, 2018 .
- JUNYA NOMOTO, NORIKAZU KOBAYASHI: An Occupational Therapist 's treatment strategy for elderly people with Dementia ~ Using Assessment by the Picture Card for Elderly with Dementia ~ . 1st Asia Pacific Occupational Therapy Symposium, 2017 .
- Natsumi kodama Norikazu Kobayashi: Effectiveness of group activity using IroKaruta in elderly persons with declined cognitive function in convalescent rehabilitation ward, 1st Asia Pacific Occupational Therapy Symposium, 2017 .
- 井口知也, 山田 孝, 小林法一: 認知症者を対象とした認知症高齢者の絵カード評価法の通過率 . 第 28 回日本作業行動学会, 2017 .
- 兒玉夏実, 小林法一: 回復期リハビリテーション病棟における認知機能の低下した高齢者への色カルタを用いた集団活動の効果 . 第 51 回日本作業療法学会, 2017 .
- 野本潤矢, 楠本直紀, 小林法一: 意味のある作業への従事を支援できた認知症高齢者の事例 ~ 認知症高齢者の絵カード評価法を用いて ~ 第 26 回日本作業行動学会学術集会 2016 .
- 渡辺陵介, 小林法一: 老年期作業療法における有益な情報獲得手段としての 色カルタ(クオリア・ゲーム)の可能性 . 第 50 回日本作業療法学会, 2016 .
- Norikazu KOBAYASHI, Ryousuke WATANABE: Availability of " the Color Karuta Qualia Game " in clinical practice for the elderly with dementia. International Association of Gerontology and Geriatrics, 2015 .
- Takashi Yamada, Norikazu Kobayashi, Tamami Aida, Kirsty Forsyth: Comparing groups that used and did not use occupation for people with dementia: a pilot study. 6th Asia-Pacific occupational therapy congress, 2015 .
- 二村元気, 篠原和也, 小林法一, 山田 孝: 趣味活動や習慣の再開を目標とした重度認知症高齢者の一事例 . 第 25 回日本作業行動学会学術集会, 2015 .

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 山田 孝

ローマ字氏名:(YAMADA, takashi)

所属研究機関名: 目白大学

部局名: 保健医療学部

職名: 客員研究員

研究者番号(70158202)

(2)研究協力者

研究協力者氏名: 安永 雅美

ローマ字氏名:(YASUNAGA masami)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。